

特定非営利活動法人 日本免疫学会  
2024年度 前期 Tadimitsu Kishimoto International Travel Award  
研究発表報告書

申請者氏名	川畑 日南	会員番号	0037336	
申請者の所属・職名	大阪大学大学院 医学系研究科 生体防御学教室 博士1年			
出席会議名	5th International Conference on Innate Lymphoid Cells (ILC5)			
発表論文タイトル	Elucidating endotype-dependent therapeutic effect of biologics for severe asthma			

実施結果:

この度は、2024年度前期 Tadimitsu Kishimoto International Travel Award に採択していただき、誠にありがとうございました。私は本 Travel Award のご支援を受け、2024年7月15日から17日にかけて 5th International Conference on Innate Lymphoid Cells (ILC5) に参加しました。本学会は2年に1度、世界中の ILC 研究者が集結する場であり、第5回目となる今回は英国ケンブリッジで開催されました。

美しい街並みを眺めながら MRC Laboratory of Molecular Biology へと向かう3日間は、情報量の多さに圧倒されながらも、最先端の研究に触れることができ、高揚感に満ちていました。特に ILC 研究をリードしてきた著名な先生方の

Keynote speech や、若手研究者による最新データの発表では、論文だけでは知り得ない、研究者自身の思考を直接感じることができ、きわめて貴重な経験となったと考えます。また海外の研究者のプレゼンスタイルや発表の工夫は、非常に印象的であり、自分の発表をより魅力的にするためにも大いに参考になりました。

さらに、本学会では ILC の新たな機能やサブセットの発見、臨床応用への試み、自然免疫記憶に関する研究なども示されており、ILC 研究の多様性とアプローチの広がりを目の当たりにすることで、今後の研究に大きな指針を得たと感じています。特にヒト特有の CLC 結晶と類似したキチナーゼ様タンパクの結晶がマウスでは2型免疫のアジュバンドとして機能することを示した Dr. Bart Lambrecht や、3つの遺伝子座に異なる DNA リコンビナーゼを導入して ILC2 の特異性を高める Boolean アプローチを紹介した Dr. Aydan Szeto の発表は非常に興味深く、新たな技術を通じて「不可能を可能にする」ことの面白さや、挑戦することの重要性を強く実感しました。

2日目には私自身も「重症喘息に対する生物学的製剤のエンドタイプ依存的治療効果の解明」というテーマでポスター発表を行いました。本発表では、喘息の発症機序の違いが生物学的製剤の効果に影響を与える可能性について報告しましたが、参加者から鋭い質問や新たな視点からの suggestion をいただくことで、研究の課題や方向性もより明確になったと考えます。また、Welcome Reception や Gala dinner では、世界の若手研究者と交流することで海外のラボの文化や将来のキャリアについても話をする機会も得ました。同世代の研究者から刺激を受け、研究に対するモチベーションがさらに高まり、海外で研究するという選択肢が以前より具体的にイメージできるようになったことも大きな収穫となったと感じています。

このように、今回最先端の ILC 研究と研究者たちと直接関わることができ、新しい技術やユニークなアプローチに触れることができたことは、今後の研究生活において大きな財産となると確信しております。この貴重な経験を今後の研究に活かし、免疫学のさらなる発展に貢献していきたいと思っております。

末筆ではございますが、このような貴重な機会を与えてくださった岸本忠三先生ならびに選考委員の先生方、本賞に推薦してくださった茂呂和世先生にこの場を借りて深く御礼申し上げます。

